

# オノマトペと時を表す副詞に見られる類似性について

峯 正 志

## はじめに

本稿でいう「時を表す副詞」とは、ある出来事が起きる時間軸上の点を示す様々な要素のことで<sup>1</sup>、例えば、

「きのう、彼女と映画を見に行った。」

「第二次世界大戦は、1936年に始まった。」

における「昨日」や「1936年に」を指す。

問題は、このような表現に助詞の「に」が現れる場合と現れない場合があるということである。例えば、「昨日」、「明日」、「来年」のような語には「に」が現れないのに、「10月に」とか「平成12年」とかいった要素には「に」が現れる。また、「三日前」や「3時間後」などでは、「に」が現れたり現れなかったりする。

これには「相対的時間」と「絶対的時間」といった概念が用いられて説明されるときもあるが、うまく説明できないこともある。

ところで、オノマトペ表現にも似たような現象がある。

「太陽がぎらぎら輝いていた。」

「太陽がぎらぎらと輝いていた。」

のように、助詞の「と」が現れたり現れなかったりするオノマトペもあれば、「すっかり」のように「と」が現れないものもある。また「くるっと」のように必ず「と」が現れるものもある。

この現象については、田守・スコウラップ（1999）が「オノマトペ度」という概念で説明している。

この研究ノートでは、この二つの現象の類似性を指摘し、「時を表す副詞」の方も「オノマトペ度」と類似した概念で説明できる可能性を示唆する。

## 1. 時を表す副詞における助詞「に」の出現条件について

時を表す助詞「に」の出現の条件については、いくつか説がある。例えば、野田（1991）では、名詞の意味的な違いから説明している。

同書によると<sup>2</sup>、「明日、おととい、来年、今」のような、「話をする時点を基準にした相対的な「時」を表すことば」の場合は「に」が現れず、「1988年、3月、3時、江戸時代」のような「話をする時点を基準にしない絶対的な「時」を表すことば」の場合は「に」が現れるという。

同書の持つ入門書としての性格のため、説明が非常に単純化していることを割りいても、この説明では不十分であろう。例えば、「相対的」・「絶対的」という概念も、単純に二分できるようなものではない。たとえば、「～前」・「～後」という表現は次の例に見るように、指示的のように見えるが、助詞「に」は現れたり現れなかったりする。<sup>3</sup>

例文：二日前、あの家に空き巣が入りました。

私は二日前に、ブラジルから来日しました。

このような場合に、「に」が付いている場合が「絶対時」で付いていない場合が「相対時」である、というような説明は難しいであろう。

また、寺村（1991）では、名詞の意味的な違いに加え、情報の焦点の有無も関わっていることを指摘している。

同書では<sup>4</sup>、このような名詞を甲類（「に」が必須的であるもの）、乙類（「に」を付けることができないもの）、丙類（付けても付けなくてもよいもの）の3つに分類する。そして、甲類を「時の流れを人為的にきざんで名付けた『何年、何月、何日、何時、何分』といった名詞」で「発話時、談話場面と関係ないという意味で客観的」であるとする。乙類については、「発話の時点を中心としてある時点を指し示す種類の名詞」とする。

この分類は野田のものと同様なものである。違いは、甲類に関して「この種の名詞が「二」を必要とするのは、しかし、これらの語本来の性質に由来するというよりも、構文的な問題を考えたほうがよさそうだ」として、情報の焦点が関わっていると指摘している点である。つまり、「一般に、『いつ～する（した）か』が情報の焦点、ないし情報の重要な部分をなしているときは、『二』が必要であるのに対して、『これこれの時、どういう事が起こったか』が情報の焦点、ないし重要な部分であるときは、『二』なしで——種の提題のように一文頭におかれるようである。」と指摘している。これに関して、文頭に置かれるかどうかは別にして、そのような使い分けがあることは筆者の内省でも正しいように思われる。

同書ではさらに、他の意味の違いによる使い分けの可能性も指摘している。乙類の名詞に関して、

彼とは来週 {<sub>に</sub><sup>に</sup>} 会うことになっています。

のように、「に」を伴うこともあると指摘して、「時の幅を表すこともある名詞の場合、その幅のなかの一点を特定する場合は「二」が使われ」とする。同書では、

彼とは { <sup>来週</sup><sub>\*来週に</sub> } ずっと一緒に仕事をするになっています。  
という例文が挙げられている。

以上、名詞のもつ性格（指示的か、絶対的か）によるという説、情報の焦点が関わっているという説、その名詞句の意味的違いによるという説を見てきた。

いずれにも納得できる点はあるが、どれか一つが正しいのかということになると、いずれとも決めかねる。また、いずれも一面の正しさを伝えているとしても、これらの3つがどのように関連しているのかについてはわからない。

また、これらの説はいずれも、両者の違いがどのようなものであるかという点については説明しているが、なぜ「に」が付いた方がそのような意味になるのか（「に」が付かない方がなぜそのような意味にならないか）については説明していない。このような点について留意しながら、次にオノマトペにおける類似現象を見てみよう。

## II. オノマトペ表現における助詞「と」の出現条件について

この章では、上で述べた「時を表す副詞」における助詞「に」と類似した、オノマトペ表現における現象について述べる。

田守・スコウラップ (1999) では、「日本語オノマトペは、文中で副詞として機能するとき、その音韻形態および統語的・意味的機能によって、助詞との共起の仕方が異なる。」<sup>5</sup>として、

- 1) 助詞「と」を随意的に伴うもの
- 2) 通常助詞を伴わないもの
- 3) 「と」を伴った方が好ましいもの
- 4) 「と」を義務的に伴うもの
- 5) 「に」を義務的に伴うもの

の5種類に分類した。以下、同書に従いどのようなオノマトペがどれに分類されるのかを見ていく。

まず、助詞「と」を随意的に伴うものであるが、これは「カタカタ・カタカタと」、「ザブザブ・ザブザブと」といったCVCVという2モーラの反復形や、「キンキン・キンキンと」、「スウスウ・スウスウと」といった(C) V N ないし (C) V V の反復形、「はっきり・はっきりと」、「ぼんやり・ぼんやりと」といった(C) V N C V ri の音韻形態を持ったもの等がそうであるとしている。

以上のものは様態副詞として使われるものだが、同じ2モーラ反復形のオノマトベでも、頻度副詞、程度副詞として機能するものは、2)の通常助詞を伴わないものに分類されるという。例として「ちょいちょい」、「どしどし」や「グングン」、「すっきり」等が挙げられている。ここで「通常」とあるのは、「と」の付加を許容する話者も存在するから、と記されている。

3)の「と」を伴った方が好ましいものとしては、(C)VCVriないしCVCVNの反復形を持つオノマトベを挙げている。これらのオノマトベは、「と」の伴わない例も存在するというものの、伴った方が安定した文になるという。例としては「フワリフワリと」、「ピカリピカリと」等が挙げられている。

4)の「と」を義務的に伴うものは、1)～3)以外の音韻形態を持つ、様態副詞として機能するオノマトベであるとする。例として「ぱっと」、「ぐっと」、「コンと」、「ポンと」、「パラッと」、「バタンと」等が挙げられている。

5)の「に」を義務的に伴うものは、助詞が「と」でないということと、この場合のオノマトベが「結果副詞」として用いられるという点で1)～4)と異なっており、助詞「と」の出現条件の問題からは除外出来ると考える。

ここまでの議論では、「と」の出現は音韻的条件に基づいているように見える。しかし同書ではさらに考察を進め、別な条件が「と」の出現に関わっていることを主張する。

同書はまずこの場合の助詞の「と」と引用の助詞「と」との関連を指摘する。そして、1)擬音オノマトベは擬態オノマトベよりも引用的に用いられやすい、2)「と」を義務的に伴うオノマトベは「と」を必要としないものよりも引用的に用いられやすい、3)異形はそのもとのオノマトベよりも引用的に用いられやすい、といった点から、「オノマトベが引用的に用いられやすいほど、オノマトベ度が高く、語彙性は低い」という結論を導き出す。

ここでオノマトベ度とは「ある語が話者によって直接的な模倣として認識される程度」を指し、語彙性とは「オノマトベと推測される語が言語の中でどれほど完全に語として機能しているかという程度」を指す。直接的な模倣として認識されればされるほど通常の語彙としては認めにくくなると考えられるため、オノマトベ度が高いほど語彙性は低くなり、また逆にオノマトベ度が低いほど語彙性は高くなる。例えば、物をたたく音として「カンカン」はよく使うが「グワーン」はそれほどでもない。これを上の用語で説明すれば、「グワーン」の方がより音を忠実に再現していると考えられるので、オノマトベ度が高い。また「カンカン」の方が「グワーン」よりも語彙として定着しているので語彙性が高いと考えるのである。これを反映して、「鍋をカンカンたたく。」と言えるが、「\*鍋をグワーンたたく。」とは言えないのである。

そして、オノマトペ度の高い、つまり語彙性の低い表現はどのような効果を持った表現になるかという点、「もっとも具体的な描写力に富み、類像的で、直接的で、生き生きとした臨場感がある」表現になるという。

同書の結論をまとめると、オノマトペ度の高い（語彙性の低い）オノマトペの場合には「と」が現れやすく、オノマトペ度の低い（語彙性の高い）オノマトペの場合には「と」が現れにくいということになる。

### Ⅲ. 両者の平行性

両者の平行性を以下に述べる。

まず両者とも、助詞を伴ったり伴わなかったりすることがあり、1) 常に助詞を伴うもの、2) 常に伴わないもの、3) 伴ったり伴わなかったりするもの、の3種類に分類されるという点が上げられる。しかしこれだけでは、単に出現の仕方が似ているだけで、その出現の条件は全く異なっているかもしれない。

ここで、野田（1991）の指摘を思い出してみよう。「明日、おととい、来年、今」のような、「話をする時点を基準にした相対的な「時」を表すことば」の場合は「に」が現れず、「1988年、3月、3時、江戸時代」のような「話をする時点を基準にしない絶対的な「時」を表すことば」の場合は「に」が現れるという指摘だが、「あす」とか「いま」といった語彙と、「1988年」や「6時50分」といった語彙を比較してみたらどうだろうか。田守・スコウラップ（1999）のいう「語彙性」と関連させてみると、「あす」や「いま」といった語彙の方が「1988年」や「6時50分」より語彙性が高いと言えないだろうか。つまり前者は日常よく使うが、後者の方は前者に比べ使用頻度は非常に低く、また非常に個別的であり一般性に欠け、新しく作り出した聞き慣れないオノマトペと共通する何かを感じるのである。

では、語彙性が高いものはなに度が低いのだろうか。つまりオノマトペの場合の「オノマトペ度」にあたるものはなんだろうか。

本稿では仮にこれを「副詞度」と呼んでおきたい。時を表す副詞がどれだけ個別的、特定のであるかということで「特定度」としても良いかもしれないが、要はその結果どれだけ副詞としての地位が固まっているかということだからである。その意味では、オノマトペ度も「副詞度」の一種と捉えてもよいかもしれない。

では、このように考えた場合、どのような利点があるのだろうか。

まず第一の利点は、このような名詞の場合は「情報の焦点」、このような名詞の場合には「時の幅の中の特定の一点」を示す、というような、どのように関連するか分から

ない二つの基準に基づいているとするより、「副詞度」という一つの基準で説明できるという利点である。また、同様に、時の副詞とオノマトペによる（様態）副詞という異なった要素が、類似した概念によって説明できることも挙げられる。

第二の利点は、第2章で出した疑問、つまり「(焦点や名詞の性質の説は) 両者の違いがどのようなものであるかという点については説明しているが、なぜ「に」が付いた方がそのような意味になるのか（「に」が付かない方がなぜそのような意味にならないか）については説明していない。」という疑問の答えになるということである。つまり、情報の焦点説では、どうして「に」の付いている方が焦点表現となるのかについて明確に説明しにくい<sup>6</sup>、「副詞度」という概念を使った、「副詞度が高い要素は単独で文中に立ちやすいが、低いものは助詞の助けがなければ文中に単独では立ちにくい」という説明なら理解が容易であろう。

また、この考え方は、焦点や時の幅の中の特定の一点といった説明もそれ自身から導き出せる。「に」のついている時の副詞は、語彙性の低いオノマトペ表現のごとく、非常に情報量が多い（日常的な意味とは異なる）表現となり、非常にインパクトが高い故に情報の焦点となりうる、といった説明が可能であろう。また、時の幅を表す名詞に関しても、時の幅を表す名詞は「その間ずっと」を意味するのが通常の使い方であるため、「その幅の間のある一時点」を表す使い方は「通常」の使い方と異なるが故に「に」が用いられた、という説明が可能になる。

また、このように考えることで、英語でも同様の現象があること<sup>7</sup>の説明も可能になる。英語においても today や now といった語彙の方が、1998 や 10 o'clock といった語彙よりも語彙性が高いのは同じだからである。

しかし利点と同様、難点もある。例えば他の概念に比べ、基準がより恣意的になりうるという点、また「オノマトペ度」についても言えることだが、「語彙化が進んでいるから助詞が現れない」、「助詞が現れないから語彙化が進んでいる」という循環論になりうるという点である。

しかし、類似した現象を同じ原理で説明できるようになるという利点は、否定できないであろう。

#### IV. 終わりに

本稿での指摘をもう一度まとめてみたい。

「時を表す副詞」にも「オノマトペ」にも、場合により助詞を伴ったり伴わなかったりする現象が見られる。本稿では、この二つの現象の類似性を指摘し、「時を表す副

詞」の方も「オノマトペ度」と類似した概念で説明できる可能性を示唆した。すなわち、「副詞度」である。

【参考文献】

田守育啓、スコウラップ・ローレンス、1999、『オノマトペ ―形態と意味―』、くろしお出版、東京。

寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味 III』、くろしお出版、東京。

野田尚史、1991、『はじめての日本語文法』、くろしお出版、東京。

【注】

<sup>1</sup> 当然ながら、「三日ご飯を食べていない。」に見られる「三日」のような「期間」を表す副詞は、時に関する副詞ではあるがこれには含まれない。

<sup>2</sup> 野田 (1991) p.66 ff.

<sup>3</sup> このことは、同書 p.67にも指摘がある。

<sup>4</sup> 寺村 (1991) p.270ff.

<sup>5</sup> 田守・スコウラップ (1999) p.64 ff.

<sup>6</sup> 「時の幅の中の特定の一点」説の場合は、「に」がもともと時点を表す助詞であるため、説明は可能である。

<sup>7</sup> 寺村 (1991) p.272に指摘されている。

## On the parallel behavior of the particles used in temporal adverbials and onomatopoeic adverbials

Masashi Mine

**ABSTRACT** The particle "ni" used in the temporal adverbials shows very interesting behavior. It appears in one occasion and disappears in another. There are theories to explain this, using terms such as "(information) focus", or "semantic role". Interestingly, the particle "to", as used in onomatopoeic manner adverbials, shows the same behavior. Tamori and Schourup (1999) say that it is conditioned by the "mimeticity". This short paper points out the possibility that the case of the particle "ni" could also be explained with the same kind of concept, namely "adverbiality", setting focus or semantic role theory as its corollary.